

題 目 自己開示評価における他者期待と現実の齟齬に関する日加比較研究

氏 名 中村圭佑

指導教官 結城雅樹

本研究の目的は、自己開示の受け手の反応に着目し、自己開示が特定の社会環境における適応行動である事を検討することである。自己開示とは「自身の個人的な情報を他の人に伝えること」と定義され、社会心理学の分野では対人関係をより深める機能が注目されている。自己開示は、親密な対人関係の形成と維持の為に有用であるとされる一方、状況や内容によってはネガティブな評価をされる等、好ましくない側面を持ち合わせている。先行研究において、欧米人は東アジア人に比べて自己開示を行う程度が高い事が示されている。こうした自己開示の文化差に関して、Schug et al. (2010) は対人関係の開放性・閉鎖性を表す関係流動性に着目し、社会生態学的アプローチから検討した。高関係流動性社会は、低関係流動性社会と比べ、対人関係の組み替え機会が豊富である。こうした社会では、自分が関係相手を選択する自由度が高いだけでなく、相手にとってもより望ましい他者が現れると乗り換える事が容易であるため、相手を関係に繋ぎ止めておくために、自己開示をはじめとした関係維持行動を積極的に行う必要がある。実際、Schug et al. は、親友に対する自己開示度の日米差が、当該社会の関係流動性によって説明される事を示した。本論文では特定の社会環境において、自己開示が対人関係を深める為に適応的な行動となる為には行為者だけでなく、受け手が好意的な反応を示す事が不可欠であると考えた。そこで自己開示を行う程度だけでなく、自己開示の受け手からの評価も関係流動性によって異なるだろうという仮説を立て、3つの研究で検証した。日本国内で予備研究を行った後、関係流動性が異なる事が示されている日本とカナダで国際比較研究を行い（研究1）、ここで生じた課題を修正し、研究2で再度日加比較研究を行った。その結果、自己開示に対する受け手の評価は、日本よりもカナダで高く、その日加差は関係流動性によって説明された。また探索的に検討した、自身による評価と周囲の他者に関する評価予測との間の齟齬に関して、自身はそうでないにも関わらず、周囲の人々は自己開示をポジティブに評価しないだろうという齟齬がある事は示されたが、周囲の人々の評価予測が自己開示行動に関連を持つかに関して、一貫する結果は得られなかった。本研究により、特定の社会における適応行動を検討する際には行為の受け手の評価に着目する事の重要性を示す事が出来ただろう。